

大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連

佐久間 路 子¹ 無 藤 隆²

本研究の目的は、人間関係に応じて自己が変化する動機、変化に対する意識を測定する尺度の作成および自尊感情との関連における性差を検討することである。大学生男女742名を対象に、変化程度質問、変化動機尺度、変化意識尺度、セルフ・モニタリング尺度、相互独立の一相互協調的自己観尺度、自尊感情尺度などからなる質問紙を実施した。主な結果は以下の通りである。1) 変化動機尺度は関係維持、自然・無意識、演技隠蔽、関係の質の4因子、変化意識尺度は否定的意識、肯定的意識の2因子が見いだされ、信頼性と妥当性が確認された。2) 変化動機の関係維持、自然・無意識、関係の質は、男性よりも女性の方が得点が高かった。3) 男女ともに、変化程度は自尊感情との関連が見られなかったが、女性においてのみ否定的意識と演技隠蔽の自尊感情への負の影響が認められ、変化動機および変化意識と自尊感情との関連には、性別による違いがあることが示された。

キーワード：関係的自己、可変性、自尊感情、性差、大学生

問 題

近年の自己研究では、自己は単一不変でなく、関係や文脈に応じて多面的かつ可変的であるという考え方が取り入れられつつある (Curtis, 1991; Harter, 1998; 佐久間, 2000)。様々な人と関わりながら生活している中で、他者と一緒にいるときの自己、つまり関係的自己³が、実際の関係に応じてどの程度変化するのかについて実証的に検討している研究もある (Harter & Monsour, 1992; Ogilvie & Ashmore, 1991; 佐久間, 2001)。しかしこれらの研究においては、自己が関係に応じて多面的かつ可変的であるということが、暗黙のうちに前提とされており、なぜ関係に応じて自己が変化するのか、変化の背景や意義は直接的に検討されていない。

自己の変化に関するこれまでの研究では、関係や状況による自己の変わりやすさと心理社会的適応との関連について、2つの異なった関連が示されている。例えばセルフ・モニタリング (Gangestad & Snyder, 2000; Snyder, 1974; Snyder & Cantor, 1980) に関する研究では、

自己が関係や状況に応じて変化するということを、柔軟で適応的な能力の現れと想定している。一方、自己概念の分化度 (Donahue, Robins, Roberts, & John, 1993)、明確性 (Campbell, 1990; Campbell, Trapnell, Heine, Katz, Lavalley, & Lehman, 1996) や自己複数性 (Altrocchi, 1999) という観点から行われた研究では、自己の変化程度を自己の不安定さ、一貫性のなさとして捉え、これらが自尊感情の低さ、不適応感と関連することが明らかになっている。また見せかけの自己行動と精神的健康との関連も明らかになっており (Harter, Marold, Whitesell, & Cobbs, 1996; 堀田・無藤, 2001)、関係に応じて自己が変化するものの否定的影響が示されている。

以上のように、関係に応じて自己が変化するものが適応的なものか否かについては、矛盾した結果が示されている。しかし心理社会的適応性との関連を考える上で、単に関係に応じた自己の変わりやすさが重要とは言いきれない。自己が同じ程度変化すると考えているとしても、ある者にとっては、相手とうまくやっていくために必要な適応的な能力として理解されているかもしれない。一方、自分の弱いところを隠すことで、嫌々ながら自己を変化させている人もいるかもしれない。これら自己の変化に関する動機や意識は、個人によって異なっている可能性があり、さらに個人が変化に対してどのような動機や意識を持っているかによって、心理社会的適応との関連も異なる可能性がある。

青年期の見せかけの自己行動に関する研究では、なぜ見せかけの自己行動をするのか、その動機に着目している。Harter et al. (1996) は、①本当の自己の価値

¹ お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
QZB00731@nifty.ne.jp

² お茶の水女子大学生活科学部

³ 関係性と自己に関しては、分離や自律性に対するものとして、関係志向性に注目している研究 (ギリガン, 1986) や、関係性を包括的に捉え、その構成要素を精緻に検討している研究 (Josselson, 1992) などがあり、これらでは関係性を維持し、親密性を保ちたいという志向性が重視されている。本研究では、関係的自己を実際の生活の中で様々な人々との関わりの中で経験される自己と限定して定義し、特に関係に応じた自己の変化に対する自覚について検討する。

を低めるという臨床的文脈から引き出された動機、②印象管理やセルフ・モニタリングと共通した特徴を持つ動機、③発達上標準的な役割実験に関する動機という3つの観点を想定し、見せかけの自己行動の動機を選択させた。その結果は②が全体の60%と最も多かったが、①自己の価値を低めるという動機を選んだ青年は、見せかけの自己行動のレベルと抑うつが高く、自己肯定感(self-worth)が低いことが明らかになった。また堀田・無藤(2001)は、中高生を対象に見せかけの自己行動と、その動機、感情に関する尺度を作成し、友人関係の適応感および精神的健康度との関連を検討している。見せかけの自己行動の動機として、関係維持、役割演技、配慮、自己否定の4因子、感情は否定的感情と肯定的感情の2因子を設定し、役割演技や自己否定の動機、否定的感情が高いほど、適応感や精神的健康が低いことを明らかにしている。また性差についても検討しており、配慮や関係の維持の動機は女子の方が高く、役割演技は男子が高いことを示している。

これらの結果は、見せかけの自己行動の動機や感情に個人差および性差がみられることや特定の動機と不適応との関連を明らかにした点で、意味があるといえる。しかしあくまでも見せかけの自己に焦点を当てたものにすぎない。関係に応じて自己が変化するということは、必ずしも見せかけの自己を表明することではなく、変化をしても、見せかけや意図的な演技と捉えていない可能性がある。

佐久間(2002)は、大学生女子を対象に質問紙調査を行い、大学生女子の約90%が関係に応じて自分が変化すると考えていることを明らかにしている。さらになぜ変化するのかについて自由記述を収集・分類し、従来の研究とは違った結果を明らかにしている。すなわち自由記述では、セルフ・モニタリングで仮定されているような演技や印象形成に関わる記述や、見せかけの自己行動の動機(Harter et al., 1996)にあげられていた自己の価値を減じるというような内容は少数しかみられず、相手との関係の質(親密さ、気を許す程度など)や相手の性格や行動などから受ける直接的な影響の考慮、見せる部分と見せない部分があるという自己開示の程度、そして相手や関係への気遣い(仲良くしたい、嫌われたくない、相手を理解したいなど)に関する記述が多くを占めたのである。さらに、意図的に変化させるのではなく、自然に変化するという記述もみられた。また変化に対する意識も記述されており、その多くが変化は必要かつ当然という内容であった。

これらの結果には、日本を含む東洋の文化に優勢な、

自己は他者と根元的に結びついており、他者との相互協調的な関係の中に自己の本質を捉えるという相互協調的自己観(Markus & Kitayama, 1991)の影響があると考えられる。相互協調的自己観の強い文化において、また文化的自己観の個人への反映の程度を表す相互協調性(高田, 1999; 高田・大本・清家, 1996)が高い個人においては、自己は様々な関係の中に埋め込まれていると仮定することもでき、関係に応じて自己が変化することに対して、自己を偽るという否定的な意識よりも、当然や自然といった比較的肯定的な意識がみられると考えられる。

以上より、関係的自己の可変性の理解を探るには、変化の程度だけではなく、その動機や意識を扱うことが重要であり、それらを的確に捉えるためには、演技や隠蔽といった意識的で能動的な動機だけでなく、日本文化において特徴的な自然に、無意識的に変化するという理由も含めるべきである。また変化意識については、自分がわからなくなるようで怖い、嫌だという否定的意識に加え、必要、当然、自然といった肯定的意識を考慮する必要がある。

佐久間(2002)は自由記述をもとに、他者考慮、関係の質、演技隠蔽、自己理解願望の4因子からなる15項目の変化理由尺度を作成している。しかし、各因子に含まれる項目数が少なく妥当性が低いこと、自由記述で多くみられた「自然に変化する」という動機が因子に含まれていないという問題点があり、変化に対する理由(動機)や意識の個人差を捉えるためには、より信頼性の高い尺度を作成する必要がある。そこで本研究では、項目数を増やし「自然・無意識」といった観点を含む尺度を作成する。そしてセルフ・モニタリングや相互独立的一相互協調的自己観といった既知の概念との関連を明らかにすることで、変化動機尺度および変化意識尺度の妥当性の検討を行う(分析1)。

次に分析2では、関係に応じて自己の変化程度、変化動機、変化意識と、心理社会的適応性の一つの指標である自尊感情との関連を検討する。その際、変化程度、変化動機、変化意識のうち何が自尊感情を最も説明するのか、重回帰分析によって明らかにする。単に関係に応じて自己が変わりやすいかどうか(変化程度)ではなく、変化の動機や変化に対する意識のいくつかの要因が自尊感情と関連が見られると予想される。見せかけの自己行動に関する研究では、自己否定の動機と抑うつの高さおよび自己肯定感の低さとの関連(Harter et al., 1996)や、役割演技や自己否定の動機や否定的感情の高さと適応感や精神的健康の低さとの関連が示さ

れている(堀田・無藤, 2001)。これらの結果より, 本研究では, 見せかけの自己行動との関連が強いと思われる演技や隠すといった動機や, 否定的意識が高いほど, 自尊感情が低いという関連が予想される。一方, 変化を当然, 自然と考えている, つまり変化に対する肯定的意識が高いならば, 自尊感情が高いという関連が予想される。

さらに男性と女性では, 関係に応じた自己の変化の捉え方が異なっていると考えられ, 適応性との関連においても性別による差が見られる可能性がある。そこで分析2では, 変化程度, 変化動機, 変化意識の性差および, 自尊感情との関連における性差も検討する。文化的自己観に関する研究では, 相互協調性の他者への親和・順応は, 女性の方が高いという性差が認められており(高田他, 1996), 変化を自然・無意識と捉える傾向は女性の方が強いと考えられる。そして, アイデンティティ発達における関係性(伊藤, 1997; 杉村, 1998), 女子青年の voice の喪失(ギリガン, 1986; Harter, Waters, Whitesell, & Kastelic, 1998), 見せかけの自己(堀田・無藤, 2001)などの多くの研究から, 女性は男性よりも他者志向性や関係維持願望が高いことが示されている。したがって, 男性よりも女性の方が, 関係維持や他者への気遣いによって自己を変化させるという動機をより強く感じていると予想される。また女性は, 望ましい女性(主張的でなく, 控えめな)という社会文化的役割への同一化や, 重要な他者との関係維持のために, 自分の意見を主張しなかったり, 本当の自分を隠したりする傾向があり(ギリガン, 1986), さらにこれらを見せかけの自己行動とみなし, 本当の自分を表明できないことで悩んでいることが明らかになっている(Harter et al., 1998)。以上より, 特に女性において, 演技をしたり隠したりすることと, 変化に対する怖さや嫌悪感といった否定的意識や, 自信のなさや自己否定を意味する自尊感情の低さとの関連が見られると予想される。

方 法

調査対象者と調査時期

首都圏にある6つの大学の大学生男女742名(男性260名, 女性482名), 平均年齢19.4歳, 範囲18-24歳。ただしセルフ・モニタリング尺度に関しては, 調査対象者のうち209名(男性95名, 女性114名)のみに行った。質問紙を講義時間内に配布し, 集団的に実施した。調査時期は2000年12月から2001年7月であった。

質問紙の内容

質問紙のはじめに「私たちはいろいろな人との関係

の中で生活していますが, そういった人間関係の中で, 例えば, 母親と一緒にいるときの自分, 友達といるときの自分, 恋人と一緒にいるときの自分などが考えられると思います。それではそれぞれの人間関係における自分の様子を思い起こして, 次の質問に答えてください」という文章があり, これに続いて以下の質問に回答してもらった。

①**変化程度** 人間関係に応じて自分がどの程度変わるのかについてたずねた。評定は6段階(1. 全く変わらない 2. ほとんど変わらない 3. あまり変わらない 4. やや変わる 5. かなり変わる 6. 非常に変わる)である(分析2で使用)。

②**変化動機** 自由記述に基づく佐久間(2002)の15項目尺度では, 他者考慮, 関係の質, 演技隠蔽, 自己理解願望の4因子が見いだされている。しかし各因子に含まれる項目数が少ないために信頼性が低く, また自由記述で複数の回答が見られた, 「意識せずに, 自然に変化する」という動機が因子に含まれていないという問題点がある。そこで本研究では, 佐久間(2002)の自由記述やHarter et al. (1996)と堀田・無藤(2001)の見せかけの自己行動の動機を参考に, 合計30項目からなる変化動機尺度を作成した。

③**変化意識** 佐久間(2002)の変化意識尺度をもとに肯定的意識と否定的意識について, それぞれ5項目, 合計10項目の変化意識尺度を作成した。

④**セルフ・モニタリング尺度** Snyder(1974)のセルフ・モニタリング尺度の25項目の邦訳版(岩淵・田中・中里, 1982)を用いた。

⑤**相互独立的一相互協調的自己観尺度** 高田他(1996)による相互独立的一相互協調的自己観尺度を用いた。相互独立性, 相互協調性各10項目, 合計20項目からなる。

⑥**自尊感情尺度** Rosenbergの自尊感情尺度の邦訳版(山本・松井・山成, 1982)の10項目を用いた(分析2で使用)。

②～⑥の回答形式は5段階評定(1. 全くそう思わない 2. あまりそう思わない 3. どちらでもない 4. ややそう思う 5. とてもそう思う)とした。

分 析 1

目的と仮説

分析1では, 変化動機尺度および変化意識尺度の信頼性と妥当性の検討を行う。妥当性については, セルフ・モニタリング尺度(以下SM尺度と略す)および相互独立的一相互協調的自己観尺度(以下自己観尺度と略す)との関係を検討する。予測される関連は以下の通りである。

仮説1 SM尺度との関連 SM尺度は多くの研究で複数の下位構造からなることが指摘されており (Briggs, Ceek, & Buss, 1980 ; 岩淵, 1996 ; 水野, 1993⁴⁾), 研究間によって相違はあるものの, 主に演技性, 外向性, 他者志向性の3因子が見いだされている (Gangestad & Snyder, 2000)。SM尺度における演技性と外向性は, エンターテインメントの才能を発揮し, 人前でいかに楽しく振る舞えるかという内容を含むものであり, 一方他者志向性は, 他者がどう思っているかを考慮し, 行動を統制する側面を捉えるものである。したがって, 演技性や外向性は, 本研究で仮定している変化動機との関連は見られず, 他者志向性は, 他者との関係を維持することや, 関係の質を考慮することに関する動機と正の相関が予想される。またSMが高い者は, 変化に対して肯定的意識が高いと予想される。

仮説2 自己観尺度との関連 相互協調性には他者との対立の回避や協調を重視する他者への親和・順応と, 他者を意識し評価を気にするという評価懸念という下位領域が, 相互独立性には他者とは異なる自分自身を認識し表現する個の認識・主張と, 他者に配慮せずに自分の判断で行動する独断性が含まれる (高田他, 1996)。したがって相互協調性は, 本研究の変化動機のうち他者との関係を維持することや, 関係の質を考慮することと正の関連があると予想される。加えて他者からの評価を気にするために, 演技したり隠したりすることで自己を変化させるという動機とも関連があると予想される。また変化を意識的にではなく自然に変化すると捉え, 肯定的意識も高いことが予想される。一方, 相互独立性が高い者は, 他者を考慮する傾向が低いので, 関係を維持しようとする動機や自然に変化するという動機と負の相関が予想される。

結果

1. 各尺度の構成

①**変化動機尺度** 30項目について, 主因子法による因子分析の後, プロマックス回転を行い, 固有値と解釈可能性を考慮して4因子が妥当と判断した。因子負荷量が.30に満たない4項目を削除し, 残り26項目を用いて再度因子分析を4因子解によって行った。項目内容, 項目平均と標準偏差および回転後のパターンをTABLE 1に示す。

第1因子は, 相手とうまくやっていきたい, 関係を

TABLE 1 変化動機尺度の因子パターン (主因子法・プロマックス回転)

項目内容	FI	FII	FIII	FIV	共通性
26. 相手とうまくやっていきたいから(3.85, 0.87) ^{a)}	.85	-.01	-.20	.07	.57
15. 相手を傷つけないから(3.15, 1.10)	.69	.00	-.13	.00	.38
27. 相手の気持ちに合わせるから(3.39, 0.87)	.64	.09	-.05	-.07	.38
29. 相手に嫌われたくないから(3.38, 1.04)	.63	-.01	.18	.00	.57
11. 相手に自分をより受け入れてほしいから(3.50, 0.99)	.56	.00	.10	-.04	.39
6. 相手との関係を壊したくないから(3.49, 1.03)	.54	-.02	.06	.08	.36
16. 相手に自分をわかってほしいから(3.17, 1.04)	.51	-.05	.04	-.01	.28
20. 場の雰囲気を楽しみたいから(3.57, 1.01)	.49	-.05	.00	.14	.28
30. 相手との関係の中でなんとなくそうなるから(3.51, 1.00)	.00	.85	-.01	-.05	.71
23. 相手との関係の中で自然にそうなるから(3.55, 1.01)	.05	.85	-.08	.03	.73
9. 相手との関係の中で無意識にそうなるから(3.51, 1.03)	-.05	.82	.05	-.03	.67
14. 相手との関係の中で自動的にそうなるから(3.45, 0.99)	-.02	.80	-.02	.06	.65
5. 相手との関係の中で気づくそうなるから(3.52, 1.03)	.00	.70	.04	.01	.50
4. 相手によって自分をどう見せたいかが違うから(3.22, 1.11)	-.02	.02	.66	-.09	.40
8. 自分の嫌いなところを隠しているから(2.97, 1.06)	-.06	.02	.66	.09	.44
12. 相手によって意識的に自分を演じているから(2.75, 1.10)	-.13	-.08	.59	.03	.28
22. 自分のいいところを見せたいから(3.17, 1.02)	.22	.00	.55	-.04	.49
28. 相手に自分をよく見せたいから(3.14, 1.03)	.30	.02	.55	-.07	.58
19. 自分の弱いところを隠しているから(2.90, 1.05)	-.07	.00	.54	.18	.35
3. 相手の望む自分になろうとするから(3.14, 1.10)	.25	.04	.44	-.09	.38
7. 相手によって親密さの程度が違うから(4.21, 0.81)	.03	.01	-.06	.76	.57
2. 相手によって心を許している程度が違うから(4.37, 0.76)	-.06	.02	-.02	.69	.47
21. 相手によって自分の内面を見せられる度合いが違うから(4.07, 0.91)	.00	.06	.15	.51	.36
25. 相手によって付き合いの長さが違うから(3.65, 1.09)	.13	-.03	-.11	.46	.21
13. 相手に対する好き嫌いがあるから(3.53, 1.09)	-.02	-.13	.18	.36	.19
17. 相手との関係の中で立場が違うから(3.68, 0.94)	.01	.10	.18	.33	.21

a) 項目内容の()内は, 項目平均および標準偏差

壊したくないなどの関係維持願望と, 自分を受け入れてほしいという自己理解願望, 相手を傷つけないなどの配慮からなり「関係維持」因子と命名した。これは佐久間 (2002) の他者考慮因子と自己理解願望因子の内容を含むものである。第2因子は, なんとなく, 自然に, 無意識に変化するという項目からなり, 「自然・無意識」因子とした。第3因子は, 意識的に演じる, よく見せたいという項目と, 嫌いなところや弱いところを隠すという項目からなり, 「演技隠蔽」因子とした。第4因子は, 関係の質を表す親密さや心を許している程度などの項目からなり, 「関係の質」因子とした。また各因子に負荷量の高い項目群の信頼性係数 (Cronbach の α) を算出したところ, 関係維持が.83, 自然・無意識が.90, 演技隠蔽が.81, 関係の質が.69であり, 関係の質はやや低かったものの, 内的整合性の観点から概ね十分な信頼性が認められた。各因子に含まれる項目の評定値 (1~5点) の加算平均を算出し, 以下の分析に使用した (以下②~④も同様)。

尺度得点のピアソンの単相関係数は, TABLE 2に示すように.06~.60であり, 関係維持と演技隠蔽の相関が.60と高かった。関係維持は他者とうまくやっていきたいという願望を含む動機であるのに対し, 演技隠蔽

⁴⁾ Briggs et al. (1980) では外向性, 他者志向性, 演技性の3因子, 岩淵 (1996) では演技性, 他者志向性, 自己主張性の3因子, 水野 (1993) では社交性, 他者志向性, 擬装性の3因子からなることが示されている。

TABLE 2 変化動機尺度得点の相関

	関係維持	自然・無意識	演技隠蔽
自然・無意識	.06		
演技隠蔽	.60***	.14***	
関係の質	.26***	.18***	.37***

注1. *** $p < .001$

はよく見せたい、嫌いなところを隠すという実際の対処を含む動機である。このように内容は異なるものであるので、これらを独立の因子として以下の分析に使用することとした。

②変化意識尺度 変化意識として肯定的意識と否定的意識の2因子を想定していたので、変化意識尺度10項目について、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を2因子解によって行った。因子負荷量が.30に満たない2項目、2つの因子に.30以上の負荷量を示す1項目、計3項目⁵を削除し、再度2因子解によって因子分析を行った。回転前の累積寄与率は39.64%であった。第1因子は自分がわからなくなるようで怖い、うまくできない、演じているようでいやだ、つかれるという4項目からなる「否定的意識」、第2因子は自然、必要、当然という3項目からなる「肯定的意識」とした。各因子に負荷量の高い項目群の信頼性係数(Cronbachの α)を算出したところ、否定的意識が.70、肯定的意識が.59であった。肯定的意識の信頼性はやや低かったが、因子内の項目間の相関係数は.24～.47(いずれも $p < .001$)で有意であった。肯定的意識と否定的意識の尺度得点の相関は-.24であった。

③セルフ・モニタリング尺度 SM尺度は複数の下位構造が認められているので、25項目について因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行ったところ、固有値の推移より2因子が妥当であると解釈された⁶。因子負荷量が.30に満たない7項目を削除し、残り18項目を用いて再度因子分析を2因子解によって行った。第1因子は、演技性と外向性(社交性)とほぼ一致しており、冗談を言ったり、人を楽しませたりする能力を反映していると考え「社交性」と命名した。第2因子は他者志向性と水野(1993)の擬装性が複合した項目が含まれ、他者がどう思っているかを考慮し、他者に好意をもたれるように行動を調整する能力を表しており、「他者志向性」と命名した。各因子群の信頼性係数(Cronbachの

α)は、社交性が.81、他者志向性が.76であった。尺度得点間の相関は.23であった。

④相互独立的一相互協調的自己観尺度 高田他(1996)に基づき、自己観尺度20項目について、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を4因子解によって行ったところ、2つの項目の負荷量が.30に満たなかった。この2項目⁷を削除し、残り18項目について再度因子分析を行い、得られた各因子を相互独立性の下位領域を構成する「個の認識・主張」「独断性」と相互協調性の下位領域を構成する「他者への親和・順応」「評価懸念」とした。各因子群の信頼性係数(Cronbachの α)は、個の認識・主張が.70、独断性が.75、他者への親和・順応.55、評価懸念が.74であった。また下位領域ごとの尺度間の相関は相互独立性の「個の認識・主張」と「独断性」が.53、相互協調性の「他者への親和・順応」と「評価懸念」が.46であった。

2. 妥当性の検討

変化動機尺度および変化意識尺度の妥当性の検討のために、SM尺度および自己観尺度とのピアソンの単相関係数を算出した(TABLE 3参照)。なお本研究は対象者数が多いため、以下の分析結果は1%で有意なものについて述べる。

まずSM尺度は、他者志向性と変化動機の関係維持、演技隠蔽、関係の質との間に有意な正の相関が認められた。一方、社交性では、変化動機との間に有意な相関は認められなかった。また他者志向性、社交性ともに、肯定的意識との有意な正の相関が認められた。

次に自己観については、相互独立性では、関係維持、

TABLE 3 セルフ・モニタリング尺度および自己観尺度との相関

	セルフ・モニタリング		相互独立性		相互協調性	
	社交性	他者志向性	個の認識・主張	独断性	他者への親和・順応	評価懸念
関係維持	.08	.42***	-.22***	-.09*	.43***	.39***
自然・無意識	-.05	.13	-.09*	-.18***	.11**	.13***
演技隠蔽	-.01	.57***	-.19***	-.17***	.27***	.45***
関係の質	-.01	.26***	.02	-.04	.08*	.19***
肯定的意識	.20**	.26***	.03	.02	.08*	.09*
否定的意識	-.13	-.07	-.15***	-.15***	.15***	.29***

注1. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注2. SM尺度の有効回答者数は、209名(男性95名、女性114名) 自己観尺度の有効回答者数は、742名(男性260名、女性482名)

⁵ 削除した項目は「まわりに左右されるのでよくないことだ」「楽なことで、居心地がいい」「いろいろな自分になれるので楽しい」である。

⁶ 固有値は、4.44, 3.21, 1.63, 1.36, 1.21, 1.10であり、第3因子以降に減少が見られたので、2因子が妥当と判断した。

⁷ 削除した項目は、14「どう感じるかは他者や状況によって変わる」と20「相手や状況で態度や行動を変える」の2つである。本研究では同一の質問紙で、関係に応じた自己の変化動機および変化意識をたずねているために、この2項目に対して他の項目と異なった反応がみられたと推測される。

自然・無意識、演技隠蔽、および否定的意識との間に負の相関が見られた。一方、相互協調性では、全ての動機と否定的意識に正の相関が認められた。

考察

第1に、本研究の動機はセルフ・モニタリング能力のうち、社交性ではなく、他者志向性との関連が強いこと、また肯定的意識は、社交性と他者志向性の両方と関連が強いという、仮説1を支持する結果が示された。第2に、自己観尺度についても、仮説2を概ね支持するような関連が明らかになった。そのうち本研究の演技隠蔽という動機は、相互協調性とは正の相関が、相互独立性とは負の相関が認められた。演技隠蔽は、SM尺度の他者志向性との間に正の相関が見られたことから、他者からの評価を気にして、演技したり隠したりするという意味合いが強い。そのためにこのような関連が認められたと考察される。また肯定的意識と自己観との関連は見られなかったが、否定的意識は相互独立性と負の関連、相互協調性と正の関連が認められた。相互協調性が高い人は、他者との関係を維持するために自己が変化すると考えている場合でも、それがうまくできなかった場合、変化に対して不安感や嫌悪感を抱くために、否定的意識を持ちやすいと考えられる。一方、相互独立性の高い人は、そもそも自己を関係と切り離して考える傾向が強いため、変化に対して不安感を抱きにくいと考察される。以上より、仮説1および2は支持され、変化動機尺度と変化意識尺度の妥当性が確認された。

分 析 2

目的と仮説

分析2では、変化程度、変化動機、変化意識の性差および、自尊感情との関連における性差を検討する。

仮説1 変化動機の関係維持と自然・無意識は、男性よりも女性の方が得点が高い。

仮説2 変化程度は自尊感情と直接的な関連は見られない。変化動機演技隠蔽や否定的意識が高いほど自尊感情が低く、肯定的意識が高いほど自尊感情が高い。またこれらの関連は、男性よりも女性の方が強い。

結果

1. 尺度の構成および平均点の性差について

分析2では、調査項目のうち、変化程度、変化動機、変化意識、自尊感情のみを以下の分析に使用した。変化程度は、評定(1~6点)をそのまま得点として、以下の分析に用いた。変化動機および変化意識は、分析1と同様に、各因子に含まれる項目の評定値(1~5点)の

加算平均を算出した。自尊感情尺度は、10項目について主成分分析を行ったところ、第1主成分の負荷量が項目8のみが極端に低く、Cronbachの α 係数も全10項目については.82であるのに対し、項目8を除いた9項目については.85と値が上昇した。そこで項目8を除きそれ以外の9項目を採用し、9項目の合計得点(範囲9~45点)を自尊感情得点とした。

各尺度の得点の性差を検討するためにt検定を行った。男女別の平均値と標準偏差およびt値をTABLE4に示す。まず変化程度には性別による差が見られなかった。変化程度の回答分布を見てみると、変わらない(1. 全く変わらない, 2. ほとんど変わらない, 3. あまり変わらない)と回答した者は、全体の9.8%のみであり、4. やや変わるが47.0%, 5. かなり変わるが37.3%, 6. 非常に変わるが10.5%であり、対象者の約9割が変化すると考えていることが明らかになった。次に変化動機では、関係維持、自然・無意識に性別による有意な差が認められ、いずれも男性よりも女性の方が得点が高いことが明らかになった。またTABLE4より、男女ともに関係の質の得点が高く、演技隠蔽の得点が低いこと、肯定的意識の方が否定的意識よりも得点が高いことがうかがえる。

2. 変化程度、変化動機、変化意識の関連について

変化程度、変化動機、変化意識の関連を検討するために、それぞれの得点について男女別にピアソンの単相関係数をもとめた(TABLE5参照)。まず変化程度は、関係維持を除く変化動機および肯定的意識との間に有意な正の相関が認められた。次に変化動機については、関係維持と演技隠蔽は、肯定的意識と否定的意識の両方に相関が見られた。ただし、性別によって関連の強さは異なり、男性では肯定的意識との関連の方が、女性では否定的意識との関連の方が強かった。関係の質は、男女ともに肯定的意識と有意な相関が、自然・無意識は女性のみで肯定的意識との有意な相関が認めら

TABLE 4 男女別の平均値(標準偏差)とt検定の結果

	男性	女性	t 値
	平均値(標準偏差)	平均値(標準偏差)	
変化程度	4.45(0.96)	4.41(0.81)	0.47
関係維持	3.32(0.68)	3.50(0.66)	3.42**
自然・無意識	3.25(0.87)	3.65(0.82)	6.00***
関係の質	3.86(0.58)	3.95(0.60)	2.10*
演技隠蔽	3.04(0.73)	3.05(0.69)	0.15
肯定的意識	3.83(0.67)	3.86(0.66)	0.56
否定的意識	2.77(0.85)	2.86(0.82)	1.47
自尊感情	29.88(6.58)	28.87(6.68)	1.99*

注1. * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

TABLE 5 変化程度、変化動機、変化意識の単相関係数

	変化程度		肯定的意識		否定的意識	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
関係維持	.04	.08	.19**	.12*	.15*	.31***
自然・無意識	.13*	.23***	.12	.17***	.02	-.06
演技隠蔽	.17**	.28***	.23***	.15**	.14*	.30***
関係の質	.17**	.28***	.26***	.33***	.02	.05
肯定的意識	.32***	.15**				
否定的意識	-.04	-.05				

注1. * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

れた。

3. 変化程度、変化動機、変化意識と自尊感情との関連について (TABLE 6 参照)

変化程度、変化動機、変化意識と自尊感情とのピアソンの単相関係数を算出したところ、男女ともに否定的意識と自尊感情の間に有意な負の相関が認められた。女性では、変化動機の関係維持および演技隠蔽との間に有意な負の相関が、また肯定的意識とは正の相関が認められた。さらに自尊感情を目的変数とする重回帰分析を行ったところ、男性では否定的意識の弱い負の影響が見られたものの、決定係数は有意ではなかった。一方女性では、関係の質の弱い正の影響と演技隠蔽および否定的意識の負の影響が認められた。

考察

まず変化動機では、男女とも関係の質が高く、演技隠蔽が低い傾向が、変化意識では、男女とも肯定的意識の方が否定的意識よりも高い傾向が見られた。大学生では男女ともに、変化に対して肯定的であり、関係の質を考慮して変化する傾向があることが示された。変化程度、変化動機および変化意識における性差については、関係維持と自然・無意識が男性よりも女性のほうが高く、仮説1を支持する結果が認められた。この結果は、他者との関係を重視し、関係の中に自己を

捉えるという相互協調性が男性よりも女性の方が高いこと⁸ (高田他, 1996)、女性は男性よりも関係維持願望が高いこと (堀田・無藤, 2001) から考察される。一方演技隠蔽は、性別による差は認められず、この動機をどの程度考慮しているかという点では、性差は見られないことがわかった。演技隠蔽は、関係維持との相関が高かったが、これらの結果から、2つは異なった意味を持つ独立の因子であることが示唆された。さらに変化程度や変化意識では性差が見られなかったのに対し、変化動機で差が見られたことから、女性の方が変化に対して明確な動機付けを持っていると考えられる。

次に変化程度、変化動機、変化意識と自尊感情との関連については、男女とも変化程度の説明力は低く、どの程度変化するかだけでは、自尊感情の高さには影響しないことが示された。男女ともに自尊感情との関連が見られたのは、変化に対する否定的意識であり、特に女性においてより顕著であった。つまり関係に応じて自己が変化することに対して、怖い、嫌だ、うまくできないと思っている人は、自分に対して自信がなく、自己否定的であることが示された。以上は、仮説2を支持する結果であった。

関係維持と演技隠蔽は、男性は肯定的意識と、女性是否定的意識との関連が強く、性別によって異なった関連が認められた。特に演技隠蔽は、得点には性差が見られなかったものの、意識や自尊感情との関連において、男女による違いが認められた。関係維持にはうまくやっていきたい、受け入れてほしいというような関係を良好に保ちたいという動機と、嫌われたくない、関係を壊したくないという関係が悪くなるのを避けたという動機が含まれる。また演技隠蔽も、相手によく見せたいという積極的な方向性と、弱いところや嫌いなところを隠すという消極的な方向性が含まれる。男性は、これらの動機を肯定的、積極的な意味で捉えている、すなわち自分をよく見せようと演技することは、否定的なことではなく、関係を維持するために必要なこと、当然のことと捉えている可能性がある。

一方、女性では、否定的意識との関連に加え、演技隠蔽と自尊感情との直接的な負の関連も認められた。堀田・無藤 (2001) でも、青年女子で役割演技と否定的感情の精神的健康への否定的な影響が明らかになって

TABLE 6 自尊感情との単相関係数および標準偏回帰係数

	単相関係数		標準偏回帰係数	
	男性	女性	男性	女性
変化程度	-.09	-.07	-.08	-.08
関係維持	.04	-.15**	.01	.04
自然・無意識	-.11	-.04	-.10	-.06
演技隠蔽	-.08	-.24***	-.04	-.18**
関係の質	-.02	.02	.00	.12*
肯定的意識	.01	.15**	.01	.06
否定的意識	-.17**	-.43***	-.16*	-.39***
自由度調整済み決定係数			.02	.21
F 値			1.83	19.74***

注1. * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

⁸ 本研究においても、相互独立の一相互協調的自己観には性差が認められており、相互独立性は男性が (個の認識・主張: $t_{(740)}=3.86$, 独断性: $t_{(740)}=4.61$, とともに $p<.001$), 相互協調性は女性の方が (他者への親和・順応: $t_{(740)}=3.72$, $p<.001$, 評価懸念: $t_{(740)}=2.01$, $p<.05$) 得点が高かった。

おり、女性にとって演技をすることや隠すことは、見せかけの自分を表出することになり、そのために否定的意識も高く、自尊感情への負の関連が見られたと考えられる。ただし自尊感情が低い人は、自分に自信がなく、そのままの自己を表出することにためらいがあるために、演技隠蔽の動機を強く感じているとも考察できる。

さらに関係の質を考慮して自己を変化させることや、意図的にではなく自然に変化すると考えている人は、肯定的意識が高いという、動機と意識の肯定的な関連が明らかになり、特に女性においてその関連が強かった。これらの結果は佐久間(2002)の結果とほぼ一致している。ただし肯定的意識と自尊感情との関連は、正の単相関が認められたものの、重回帰分析では有意な影響は見られず⁹、明確な関連性は見られなかった。

また自然・無意識は、自尊感情との関連が見られなかったが、その理由として、意図的ではなく変化すると考えている場合も、相手に流されてしまうというような主体性のなさとして捉えている場合も、さらには変化の動機を自分でもよく説明ができない、意識したことがないという場合にもこの得点が高くなってしまおうと考えられる。自然・無意識は、否定的でない動機としても、否定的な動機としても捉えられる可能性があるために、自尊感情と関連が見られなかったと考察される。

全体的考察

本研究では、変化動機および変化意識尺度作成および信頼性、妥当性の検討を第1の目的とした。佐久間(2002)を基に項目数を増やし作成した変化動機尺度は、関係維持、自然・無意識、演技隠蔽、関係の質という4因子について信頼性と妥当性が認められた。一方、変化意識尺度は、肯定的意識と否定的意識の2因子のうち、肯定的意識の信頼性がやや低かった。肯定的意識に含まれる項目が、必要、当然、自然の3項目と少なく、その内容も変化は望ましいという積極的肯定というよりも、暗黙の肯定という意味合いが強い。これらの項目に関しては、今後再検討が必要と考えられる。

分析2では、変化程度、変化動機、変化意識の性差および自尊感情との関連における性差を検討した。まず、変化動機の関係維持、自然・無意識は、男性より

も女性の方が得点が高いという仮説と一致した性差が明らかになった。次に自尊感情との関連については、男女ともに、関係に応じた自己の変化しやすさだけでは、自尊感情には影響が見られないこと、また女性において、否定的意識と演技隠蔽の自尊感情への負の影響があることが示された。演技隠蔽は、得点自体には性差がみられなかったが、変化意識や自尊感情との関連については、男女による違いが明らかになった。これらの結果からも、変化動機と変化意識に着目し、それらの関連を検討することの有効性が示唆されたといえる。

次に本研究の問題点と今後の課題を述べる。本研究は、関係的自己の可変性に関する自覚的な自己認識を捉えていると考えられるが、質問紙では関係に応じて自己がどの程度「変わるか」という教示を用いている。この教示が主体的に自分を「変える」という自己呈示的側面への考慮を多少とも弱め、どちらかという自己の受け身的変化あるいは、自然変化のようなものを多く取り出すような反応バイアスを生じさせてしまった可能性は否定できない。

また青年期のはじめには見せかけの自己に関する意識が高まることが示されているが(Harter, 1998)、中学生や高校生が関係に応じて自己が変化することに対してどのような意識を持っているのかについては検討されていない。今後は、青年期を対象とした発達の変化を検討する必要がある。

最後に本研究では、変化動機および変化意識と自尊感情との肯定的関連については、関係の質や肯定的意識の弱い関連が見られたのみで、明確な関連性は見いだせなかった。しかし関係に応じて様々に変化をしても、それが見せかけの行動ではなく、自然な行動と捉えている人は、自己肯定感が高い可能性がある。本研究では、変化動機と変化意識の自尊感情への否定的な影響を明らかにしたが、今後は関係的自己の可変性の肯定的意義を明らかにしていくことが課題といえよう。

引用文献

- Altrocchi, J. 1999 Individual differences in pluralism in self-structure. In J. Rowan, & M. Cooper (Eds.), *The plural self : Multiplicity in everyday life*. London : Sage. Pp.168-182.
- Briggs, S.R., Ceek, J.M., & Buss, A.H. 1980 An analysis of the Self-Monitoring Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 679-686.

⁹ 肯定的意識と関係の質は有意な単相関($r=.33$)があるために、重回帰分析では、肯定的意識の自尊感情への影響が抑制されてしまい、関係の質のみに自尊感情への弱い正の影響があらわれたと考えられる。

- Campbell, J.D. 1990 Self-esteem and clarity of the self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 538-549.
- Campbell, J.D., Trapnell, P.D., Heine, S.J., Katz, I. M., Lavalley, L.F., & Lehman, D.R. 1996 Self-concept clarity : Measurement, personality correlates, and cultural boundaries. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 141-156.
- Curtis, R.C. (Ed.) 1991 *The relational self*. New York : Guilford Press.
- Donahue, E.M., Robins, R.W., Roberts, B.W., & John, O.P. 1993 The divided self : Concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 834-846.
- Gangestad, S.W., & Snyder, M. 2000 Self-monitoring : Appraisal and reappraisal. *Psychological Bulletin*, **126**, 530-555.
- ギリガンC. 岩男寿美子(監訳) 1986 もうひとつの声 : 男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ 川島書店 (Gilligan, C. 1982 *In a different voice : Psychological theory and women's development*. Cambridge, MA : Harvard University Press.)
- Harter, S. 1998 The development of self-representation. In W.Damon, & N.Eisenberg (Eds.), *Handbook of child psychology* vol.3. New York : Wiley. Pp.553-617.
- Harter, S., Marold, D.B., Whitesell, N.R., & Cobbs, G. 1996 A model of the effects of perceived parent and peer support on adolescent false self behavior. *Child Development*, **67**, 360-374.
- Harter, S., & Monsour, A. 1992 Developmental analysis of conflict caused by opposing attributes in the adolescent self-portrait. *Developmental Psychology*, **28**, 251-260.
- Harter, S., Waters, P.L., Whitesell, N.R., & Kastelic, D. 1998 Level of voice among female and male high school students : Relational context, support, and gender orientation. *Developmental Psychology*, **34**, 892-901.
- 堀田仁美・無藤 隆 2001 青年期における見せかけの自己行動と友人関係の適応感および精神的健康との関連 お茶の水女子大学発達臨床心理学紀要, **3**, 79-91.
- 伊藤美奈子 1997 個人志向性・社会志向性から見た人格形成に関する一研究 北大路書房
- 岩淵千明 1996 自己表現とパーソナリティ 大淵賢一・堀毛一也(編) パーソナリティと対人行動 対人行動シリーズ5 誠信書房 Pp.53-75.
- 岩淵千明・田中國夫・中里浩明 1982 セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究, **53**, 54-57.
- Josselson, R. 1992 *The space between us : Exploring the dimensions of human relationships*. San Francisco : Jossey-Bass Publishers.
- Markus, H.R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- 水野邦男 1993 セルフ・モニタリング尺度の構成概念妥当性について 同志社大学文化学年報, **42**, 34-51.
- Ogilvie, D.M., & Ashmore, R.D. 1991 Self-with-other representation as a unit of analysis in self-concept research. In R.C. Curtis (Ed.), *The relational self*. New York : Guilford Press. Pp.282-314.
- 佐久間(保崎)路子 2000 多面的自己 : 関係性に着目して お茶の水女子大学人文科学紀要, **53**, 435-451.
- 佐久間路子 2001 幼児期・児童期における関係的自己の発達 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化論叢, **3**, 33-44.
- 佐久間路子 2002 大学生における関係的自己の可変性の理解 : 変化理由と変化意識に着目して お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化論叢, **4**, 85-94.
- Snyder, M. 1974 Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526-537.
- Snyder M., & Cantor, N. 1980 Thinking about ourselves and others : Self-monitoring and social knowledge. *Journal of Personality and Social psychology*, **58**, 222-234.
- 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成 : 関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, **9**, 45-55.
- 高田利武 1999 日本文化における相互独立性・相互

協調性の発達過程：比較文化的・横断資料による

実証的検討 教育心理学研究, 47, 480-489.

高田利武・大本美千恵・清家美紀 1996 相互独立的
一相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成 奈良大
学紀要, 24, 157-173.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知され
た自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-
68.

付 記

本論文の作成にあたり, ご指導いただきました京都
大学遠藤利彦先生, 調査にご協力頂きました帝京大学
坂上裕子先生, 相模女子大学塩崎尚美先生, 東京工業
大学岩男征樹先生に感謝申し上げます。

(2001.11.19 受稿, '02.11.18 受理)

Variability in the Relational Self and Self-Esteem : College Students

MICHIKO SAKUMA (GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SCIENCES, OCHANOMIZU UNIVERSITY) AND
TAKASHI MUTO (FACULTY OF HUMAN LIVING AND ENVIRONMENTAL SCIENCE, OCHANOMIZU UNIVERSITY)
JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2003, 51, 33-42

The aims of the present study were to construct scales measuring motives toward the self-concept depending on social relations and the sense of variability in that aspect of self-concept, and to examine gender differences in the relation between these scales and self-esteem. Questionnaires that included scales evaluating the degree of their perceived variability, motives toward and sense of variability, and self-monitoring, as well as independent and interdependent self-construal were completed by 742 college students. The main results were as follows : (1) Factor analysis on motives toward variability yielded 4 factors (maintaining social relations, unintentional/unconscious, acting/masking, and relationship quality), whereas factor analysis on sense of variability yielded 2 factors (positive and negative sense of variability). Reliability and validity of those scales were confirmed. (2) Women scored higher than men on maintaining social relations, unintentional/unconscious, and relationship quality. (3) Negative sense of variability and self-concept variability by way of acting/masking were negatively correlated with self-esteem for the women only, which suggests that a gender difference may exist in the relation between variability of relational self and self-esteem.

Key Words : relational self, variability, self-esteem, gender differences, college students